

小学校教師の感情労働がバーンアウトに及ぼす影響

人間発達教育専攻

臨床心理学コース

M11062H

中野裕香子

1. はじめに

Hochschild, A. R. (1983 石川他訳 2000)は肉体労働や頭脳労働とは別に第3の労働として「感情労働(emotional labor)」という概念を提唱した。これは「公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行う感情の管理」であり、肉体労働と同様に「賃金と引き換えに売られ、したがって交換価値を有する」とされている。教師の仕事の中にも感情労働の要素が含まれている(久保, 2004; 秋田, 2006; 伊佐, 2009)。

本研究では、小学校教師の感情労働がバーンアウトに及ぼす影響について探り、それに基づいて、教師のメンタルヘルスを維持・向上させる方法について提言した。

2. バーンアウトと感情労働

文部科学省がまとめた調査結果によると、教員における精神疾患以外の病気休職者はほぼ横ばいであるのに対し、精神疾患を理由とする休職者は増加傾向にあると示されている。中島(2003)は、心の病気のために医療機関を受診、そして休職する教師の数が増加しており、その要因のひとつはバーンアウトだと述べている。久保(2004)は、ヒューマン・サービス職の特性の中にこそ、バーンアウトの本質を見つけ出すことができるはずだと述べ、「クライアントとの関係に伴う情緒的負担感」という視点で、感情労働という概念を捉えようとしている。

Hochschild, A. R. (1983 石川他訳 2000) は、バーンアウトを「労働者があまりにも一心不乱に仕事に献身し、そのため燃え尽きてしまう危険性のあるケース」と捉えている。

3. 研究の目的

田上・山本・田中(2004)は、教師のストレスに影響を及ぼす要因をその職業の特性から、職業の特殊性、個人特性、環境の特異性の3つに分類した。本研究では、それら諸要因が、感情労働を媒介して、どのようにバーンアウトに影響を与えているのか検討する。また、諸要因と感情労働との関連に着目して、バーンアウトを防ぐ対処法を探る。

4. 調査方法

(1) 調査対象者：A県公立小学校教員344名に質問紙を配布。うち235名から回答を得た(回収率68.3%)。

(2) 調査時期：2012年5～6月

(3) 調査手続き：質問紙調査

・フェイスシート

・尺度

①バーンアウト尺度…新井(1999)が田尾・久保(1996)を参考に作成した。

②感情演技尺度(神谷・戸田・中坪・諏訪, 2011)

③日本語版精神健康調査票(GHQ28)…Goldberg, D. P. (1972)により開発されたGeneral Health Questionnaire(GHQ)の日本語短縮版(中川・大坊, 1985)である。

④日本版Wong and Law Emotional Intelligence Scale(WLEIS)(豊田・山本, 2011)

⑤自己抑制型行動特性尺度(宗像, 1996)

⑥組織特性に関する尺度(新井, 1999)

⑦教師効力感尺度…谷口(2006)が中西(1998)を参考に作成した。

⑧生徒との関わりにくさ尺度…谷口(2006)が笠井・三浦(1999)を参考に作成した。

⑨教師の信念尺度…鈴木(2008)が、河村・國分(1996)をもとに作成した。

5. 結果と考察

感情労働を媒介してバーンアウトに及ぼす影響についての検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。感情演技とバーンアウト、GHQを潜在変数とし、それぞれの下位尺度を観測変数として検討した。その結果、自己抑制型行動特性、教師効力感、子どもとの関わりにくさ、教師の信念は、感情演技を介してバーンアウトに影響を及ぼしていることが明らかになった。そして、感情演技はバーンアウトに直接的に影響を及ぼす一方、精神的健康に影響を及ぼし間接的にバーンアウトに影響していることが示された。学校組織特性は子どもとの関わりにくさと教師効力感、Emotional Intelligenceは教師の信念と教師効力感に直接影響を及ぼし、それらを介して感情演技、精神的健康、バーンアウトにと影響を及ぼしていた。

また、性差(男性と女性)と教職経験年数の差(若年群(20年未満)とベテラン群(20年以上))を多母集団の同時分析で検討した。その結果、それぞれの影響の強さは、性別、教職経験年数によって異なっていた。男性とベテラン群は、教師効力感が低いほど過度な感情演技を行うことが示唆された。女性と若年群は、教師の信念が低いほど過度な感情演技を行うことが示唆された。

男性よりも女性の方が子どもに対して指導の困難さを感じていることが分かった。女性にとって教師の信念を高く持つことは、子どもへの指導強化と自信につながり、教師自身の期待する枠組みの中で子どもと関わることができると考えられる。つまり、女性は教師の信念が低い者ほど子供への指導に困難をきたし、感情演技をする頻度や必要性は高くなる。

その結果、バーンアウト度が高くなるものと推察される。一方、男性では、効力感の低い者ほど子どもとの関係に不安が高まる。その結果、感情演技を過度に行うことで精神的健康(特に「不安と不眠」)に影響を及ぼしてバーンアウトに至るのではないかと推察される。

ベテラン教師は授業指導を重視し自己評価が高く、多忙や加齢による健康上の悩みはあるものの、教師としての中核的な悩みを持つ者は少ない(伊藤, 2000)。しかし、ベテラン群は子どもとの関係の不安定さから教師効力感が低下した場合は、過度な感情演技を行い、精神的健康を介してバーンアウトを起こす可能性が考えられる。

「感情演技」の「親への隠蔽」において、若年群はベテラン群よりもわずかながらも影響が高く示されていた。その結果から、経験の浅い若年群は保護者に対して関わりにくさを感じていることがうかがえる。若年群では、教師の信念が低いほど、学習・生活指導や保護者対応の困難さから教職に対する自信喪失につながり、感情演技度が増してバーンアウト度が高くなると考えられる。

性差や教職経験差によって、感情演技を高める要因は異なった。これは、自分がなぜバーンアウトを起こしたかという理由として、本人が受け入れやすい説明であると言える。感情演技は、教師個人によって差はあるものの自らのコントロールにより、日常的に小学校の指導現場において行われている。そして、過度な感情演技を行うことは、バーンアウトや精神的健康に影響を及ぼす。つまり、どの教師も感情演技を行い、バーンアウトまたは精神的健康の悪化となり得る。今後、感情演技を軽減させていく対策や感情演技を指導に活用していくストラテジーを構築していくことが必要である。

主任指導教員 岩井圭司

指導教員 岩井圭司